

氏 名	佐々木 一 泰		
学位の種類	博士 (芸術文化学)		
学位記番号	甲博文第 18 号		
学位授与の日付	平成 30 年 3 月 22 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 (課程博士)		
学位論文題目	G. Th. リートフェルトの建築構法に関する研究		
論文審査委員	主査 教授	山 形 政 昭	
	副査 教授	門 内 輝 行	
	副査 教授	加 治 大 輔	
	副査 准教授	奥 佳 弥	

内容の要旨

本論はオランダにおいて 20 世紀初期に活躍した建築家 G.Th.リートフェルト(Gerrit Thomas Rietveld 以下リートフェルト、1888-1964) の建築作品を建築構法の観点から考察したものである。リートフェルトの活動はレッド&ブルー・チェアー(1918) と建築における第 1 作のシュレーダー邸(1924) の成功により、モダニズム建築の一翼を担ったデ・ステイル(De Stijl) の主要メンバーとして知られている。リートフェルトの建築に関する研究書籍に関しては、本論第 1 章に詳しく記されるように種々あり、日本では奥佳弥(本学准教授)の研究および著書『リートフェルトの建築』(2009) もあり、氏の事績は広く知られ、多くは合理主義美学に基づくモダンデザインの結果として評価されている。

そうしたなかで論者はリートフェルトの建築における煉瓦壁、木軸、鉄骨等による建築構法に着目し、それらの自在な活用がリートフェルト独自の建築空間と表現の背後にあるとし、検証を試みている。そのため現地を訪ね 114 件に及ぶ建築調査および、構法の理解に欠かせない設計図面の調査、分析と考察を行ったことが本論の第 1 の特色となっている。

ところで論者がリートフェルトに関心を得たのは学部時代の 1995 年のことで、当時始まっていた建築 CAD による 3D モデリングの作図例としてリートフェルトの建築を扱ったことに始まるという。その優れたスキルにより、2007 年に奥准教授のリートフェルトの建築調査に同行し多数のアイソメ図面作成を行っており、その作業で得た収穫が本研究へと繋がっている。また、論者は一時期インテリア・デザイン事務所での職歴があり、家具から建築へという設計実務における経験があり、構法とデザインの関係に関心をもってきたという。そうした 10 年余りの経験を経て、2012 年に芸術研究科博士課程に入学し研究に取り組んできた。研究途上では 5 回にわたる渡蘭調査を行い主として建築設計図面調査と資料収集を果たしたもので、様々な図面解読を下とした考察が本研究の特色であり、そして得られた知見を下に作成された、建築構法を明示する種々のアイソメトリック図法の建築図面が研究成果の一部と認められるものとなっている。

本論の構成は、1 章の序、2 章「シュレーダー邸の建築構法について」、3 章「オランダの 19 世紀末から」、4 章「リートフェルトの建築による第 2 次世界大戦までの住宅建築の構法について」、5 章リートフェルトによる公共建築の構法について」、6 章「リートフェルトによる戦後の住宅建築の構法について」、そして「結び」の 7 章からなる。

1 章では、研究の背景と方法、とりわけ設計図面に関する調査について述べ、ユトレヒト中央美術館に蔵されるリートフェルト・シュレーダー・アーカイブを構成する約 2000 枚の図面、約 2000 枚の写真等の資料に行きついている。また、リートフェルトの履歴と時代背景、近代建築の動向等に目を向け簡潔にまとめられている。

2 章では、リートフェルトの建築における第 1 作であり、デ・スタイルを代表する建築と評価されるシュレーダー邸をとりあげ、その設計図面を読み解き、構法の分析と考察がなされている。そして本建築は煉瓦壁、鉄骨、そして木構造など種々の構法を併用した建築であり「近代的システムと伝統的システムの混合」という特性を積極的に見出している。

3 章では、リートフェルトがシュレーダー邸以降も使いつづけた、煉瓦造および木構造のルーツとしての伝統的技法を探るため、19 世紀、20 世紀初期のオランダ民家に着目している。調査は 130 棟の民家を保存するエンクハウゼン・ゾイデルゼー・ミュージアムなど各地の民家博物館を訪ね、煉瓦と木構造の併用による種々の民家建築構法を調べ、知見を得ている。

4章ではリートフェルトによるシュレーダー邸以降から1942年までの戦前期住宅の構法について論じている。その数は28件あり、過半の25件が煉瓦造住宅という。そこに見いだせる構法の特徴は煉瓦造の改良であり、スチールサッシによる開口部、鉄骨造の活用による設計の自由度の確保であったという。

5章では、リートフェルトの戦後期(1947~1963)の活動を特色づけた学校建築など公共建築12件をとりあげ、その構法について論じている。それらの過半は住宅と同様に組積造(煉瓦あるいはブロック造)に鉄骨を併用する設計であり、自由な平面と空間の確保を達成しているという。一方で、プレファブリケーション構法や、鉄筋コンクリート造の建築もあり、戦前とは異なる構法の活用も試みたとする。

6章では戦後期に手掛けた住宅について論じている。それら住宅作品は64件が数えられるが、注目されるものに、平屋建てで開放的平面を特色とするバンガローと称されるタイプの住宅がある。構法はやはり改良された煉瓦造であり、幾何学的平面プラン、外に大きく開く開放性などの特色を有している。そうした構法は、公共建築での経験的試みの応用と考えられている。

以上の調査と考察により結章では、リートフェルトの建築、主として住宅建築における建築構法は、煉瓦造の改良、つまり木造の活用、鉄骨造そして鉄筋コンクリートの部分的導入によって、設計の自由度を高め、開放的な空間を生みだしたところにあるという。それを実現させたのは、煉瓦壁を補強した開口部のディテールや、煉瓦壁に付加する鉄骨カーテンウォールのディテールなど、構法選択の自在性とディテールの洗練により可能としたとしている。

また、煉瓦造の汎用性を求めたこだわりに、リートフェルトのオランダの伝統、地域性に対する融和性を見出している。そうした背景に、1章で述べている氏の履歴、つまり家具デザインから建築へと歩んだ経験から、ディテールに独自性をもつ設計に至る性格を見出し、建築構法の自在性、多様性が氏の建築を豊かなものに導いたとまとめている。

こうしたリートフェルトの建築は、デ・ステイルが目指した抽象的造形思想に収まらない、個性と広がりをもつものであり、そうした多面的なリートフェルトの評価が近年なされようとしているという。

なお、本論に収められた図版において、リートフェルトの設計図面が86点、そして多数の写

真、論者の作図による図版が 32 点あり、本論の特色となっているが、設計図面において不鮮明な図版があり改善が望まれる。

審査結果の報告

本論文は内容の要旨で述べたように、20 世紀を代表するオランダの建築家 G.Th. リートフェルトの建築作品を、建築構法の観点から考察し、氏の建築造形の特徴を検証したものである。

リートフェルトの建築については、前衛芸術・建築運動デ・ステイル(De Stijl) の理念、美学を建築において実現した作家として、これまで種々の研究があり、我国では奥佳弥(本学准教授)博士の 1990 年代における一連の研究、そして著書『リートフェルトの建築』(2009)もあり良く知られている。

そうしたうえで、煉瓦造に鉄骨造、コンクリート造等を併用して構成する建築構法に着目した論者の視点について、奥副査は「これまでのリートフェルトの建築に関する研究は、主に意匠とその理念・思想、社会的背景に着目し建築家の作品およびその活動を位置づけようとする歴史・意匠研究が中心であったのに対し、構法に着目することによって、別の視点から総合的に彼の建築の特徴・独創性を明らかにしようとする本研究テーマの意義は高い」としている。

ところで、論者の本研究の端緒は、2007 年、奥准教授の建築調査に同行し、リートフェルト作品の建築図面作成を担当したことに遡る。以来 6 回にわたる現地視察調査を重ねてきたもので、114 件(現存建築は凡そ 80 件)を数えるリートフェルト作品の殆どを調査し、そして構法の確認と検討に欠かせない建築設計図面資料をユトレヒト中央美術館に蔵されるリートフェルト・シュレーダー・アーカイブに収められたマイクロフィルム資料に行きつき活用している。そうした行動努力は、審査員一同の称賛するところである。

本論における、建築調査と分析内容は、先の要旨に記したように、最初の建築作品にして重要なシュレーダー邸に関する 2 章、及び 4~6 章にわたり、37 件の建築作品を事例に論じ、加えてリートフェルトの全建築作品 111 件における構造等を明らかにした一覧表を作成しまとめている。これによって、リートフェルトの活動履歴と建築作品の内容が端的に把握されている。この成果に関して門内副査の所見を挙げておきたい。

「デ・ステイルの新造形主義の理論・主張をきわめて純粋な形で建築作品に適用したリートフェルトの建築作品は、抽象的な形態や色彩のコンポジションとして構成されているが、実はそれが伝統的な煉瓦造に鉄骨の補強を施したり、開口部を改良したりすることで、それまでの煉瓦造とは異なる近代的な表現を獲得していることを明らかにしたところに、本研究の最大の特徴がある。家具のデザインから出発し、インテリア、住宅、公共建築へと対象を拡大していったリートフェルトにとっては、空間表現が主たる目標となっており、それゆえに建築構法の一貫性などに縛られることのない自由な空間表現を展開できたのではないかと考えるが、そのようなリートフェルトの設計方法と建築生産の実相を浮かび上がらせたことは興味深い研究成果と言える。」

ところで、「構法」の意味について、門内副査は次のように問う。「構法という言葉については、内田祥哉氏を引用して「建築を構成する方法」とだけ述べているが、これだけでは不十分な説明である(論文 p.14、注 1)。この「構法」に関する理解の浅さが、本論全体で、「構法」＝「構造法」(煉瓦造、鉄骨造、鉄筋コンクリート造)という読み替えに繋がっているように思う。「建築構法」は建築の諸要素がどのように建築全体に統合されるかを問う概念として構想されたもので、やがて「構法計画」なる概念へと発展していく。このように「構法」の概念を拡張して考えると、煉瓦造、鉄骨造、鉄筋コンクリート造などの構造法をどのように組み合わせるかを問うことがまさしく「構法」の問題であり、したがって、様々な構造法を組み合わせたリートフェルトは、「構造法」ではなく、「構法」という視点からデ・ステイルという新しい空間表現を可能にしたと説明することができる。すなわち、筆者は「構造法」を研究したのではなく、論文題目にあるように「構法」を研究したのであり、シュレーダー邸の分析からそのことが読み取れるが、他の章では「構法」よりも「構造法」が主題になっているように思える。それは筆者の「建築構法」の定義の甘さによるのではないか。(注 1)だけでなく、本文中で、論文主題となっている「建築構法」の概念に関する説明をしっかりと記述しておく必要がある。」

同種の指摘は奥副査による次の見解とも重なる。「構法、つまり構造、素材、仕上げ、スケール、モジュールなどをどういう部分にどのように使い分けているのか、そしてそれによりどのような空間造形が獲得されたのか、個別にそして具体的にみてゆくことに本研究の重要性がある。その上で、全体を俯瞰し、一貫しているところ、変化に富むところと、その特徴・特性を取りま

とめる作業が求められる。」

両副査の指摘のように、建築作品における検証の不備と、判断の急ぎすぎが気になるところであるが、第2章でのシュレーダー邸に関しては、種々の構造を活用することにより、夫々に独自の形態を生み、さらにその総合化によって、先例のない建築表現を生み出したことが良く解明されており、「構法」理解の視点については認めたい。この点に関して、加治副査の次の評価もある。

「現地調査と図面解析から、構法を通してリートフェルトの意匠設計の特質を論じた意欲作である。その魅力のひとつは、施工を通して意匠を実現させるための、建築家リートフェルトの努力や柔軟さが伝わってくることである。例えば「シュレーダー邸」における鉄の扱いについて著者は、手摺の溶接、鉄骨とアンカーのボルト接合、開口部と鉄骨柱の一体化といった違いを指摘している。論文から当時の強度上の配慮や部材製作・運搬・現場組立が想像されることに加えて、リートフェルトの身体的な感覚や建築意匠の意図までが感じられる。」

つまり、論者は建築構法を読み解くことで、資材、構造、接合、造形、空間を一連のものとして、建築を構想したとする特質を見出しているのであり、その点が評価できる。口頭試問において門内副査の「リートフェルトは設計のエンジニアではなく、アーティストだったのだろう」という趣旨の発言があり、そのことを言い当てていよう。

7章とした結章の内容は先の論文要旨に記した通りであるが、加えてモダニズム建築を先導したル・コルビジェの建築、また同時期に煉瓦造の改良を試みた建築家ミース・ファン・デル・ローエの建築などに触れ、建築表現と構法における類似性と差異について検討を試みている。この論述は未だ断片的であり、リートフェルトがオランダの地域的伝統をもつ煉瓦造を活用し、その汎用性を求めた点の指摘に留まっているが、同時期のモダニズム建築をこうした視点から再検討する研究への展開も今後可能であろう。

以上のように、本論はリートフェルトの多数多岐にわたる建築作品を対象としているため、考察過程の不備など残しているが、フィールド調査、資料調査を下に意欲的に取り組まれた成果であることは、審査委員が一致し認めるところであり、論者による今後の研究によって集成が期待できる。よって、本論文が課程博士(芸術文化学)の学位申請論文に値することは、審査委員一同

G.Th. リートフェルトの建築構法に関する研究

の認めるところである。